The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Children’s behavioural problems are perceived differently by their teachers and parents : The Hamamatsu School Survey
Author(s)	Sakurai, Norihiro
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26153
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　名　〕　Children’s behavioural problems are perceived differently by their teachers and parents

: The Hamamatsu School Survey

（子どもの行動上の問題の評価における保護者と教師の乖離：浜松市学校調査）

学位申請者　　櫻井　典啓

〔　目　　的　〕

学童期の行動上の問題（抑うつと不安、多動傾向、行為障害、仲間関係を作れないこと）を見逃すと、青年期以降の深刻な行動上の問題が生じやすい。すなわち、行動上の問題を学童期に発見し、介入することが望まれる。しかし先行研究によれば、保護者と教師の評価には乖離が生じやすく、その乖離は行動上の問題がある学童ほど大きい。したがって、保護者と教師から得られた評価データの解釈は容易でない。そこで本研究では、行動上の問題があると考えられる学童を対象に、保護者と教師の評価点の乖離の程度を定量化するとともに、乖離を説明する要因を探索することを目的とした。

〔　方　　法　〕

浜松市内の市立小学校 107 校の 2 年生（7342 人）を母集団として 7 つの行政区ごと比例割当法によって 28 校の 2246 人（30.6%）を抽出した。抽出した当該学童について、その保護者と担任教師に Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ)を用いた行動の評価を依頼した。保護者と担当教師双方から回答の得られた 798 名のうち、SDQ において両者のどちらか一方が行動上の問題があると評価した 219 名を解析の対象とした。さらに、保護者と学童の関係性を「愛着尺度（Bonding　Scale)」で測定するとともに、年齢、性別、世帯年収をはじめとする人口統計学的情報も収集し、保護者と担当教師の評価の乖離を説明する要因の候補とした。

〔　結　　果　〕

SDQ による当該学童の行動上の問題の評価では、保護者が担当教師よりも高い評点、すなわち行動上の問題をより深刻に捉える傾向が示された。保護者と担当教師の評価点の差（乖離スコア）の平均は、男児で 4.4 点、女児で 6.8 点であった。しかし、男児では、担当教師が対象児に支援員の配置が必要と判断する場合、および母親の年齢が高い場合、保護者の評点のみが低下し、乖離スコアが負の値を示した。女児では、保護者と対象児の愛着が不良であるほど、保護者の評点のみが上昇し、乖離スコアの正の値が大きくなった。

〔　総　　括　〕

SDQ を用いた行動上の問題の評価においては、保護者と担当教師の間に乖離が生じた。乖離の大きさは、当該学童への支援の必要性、母親の年齢、愛着関係によって変化した。すなわち、これらの要因は、保護者と担当教師から得られた情報に実際的な解釈を加える際に配慮すべき要因であることが明らかになった。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　櫻井　典啓　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主　査	教　授	片山　泰一
	副　査	教　授	松﨑　秀夫
	副　査	准教授	土屋　賢治

論文審査の結果の要旨

本研究は、学童期の行動上の問題を発見し、介入するために障壁となっている保護者と教師の評価の乖離を定量化し、その乖離を説明する要因を統計学的に明らかにすることを目的に行われた研究である。妥当な母集団をもとに先行研究や最新の情報をもとに絞り込まれた行動評価尺度（子どもの強さと困難さに関する質問紙：SDQ）と保護者と学童の関係性については「愛着尺度（Bonding　Scale）」を用いた結果、保護者と担当教師の間の乖離の大きさは、当該学童への支援の必要性、母親の年齢、愛着関係によって変化することを導き出し、配慮すべき要因を科学的に示したことは、大変意義深く、博士（小児発達学）の学位授与に値する。